

事業報告書

関西大学大学院外国語教育学研究科
「日本語教育専門家養成講座」の
見直し・拡充委員会の開催

団体名： 学校法人 関西大学

実施期間： 2018 年 7 月 19 日～3 月 20 日
2019 年 4 月 1 日～9 月 30 日

2018 年度・2019 年度文化庁委託事業

目次

1. 事業の概要	4
1.1 事業の名称	4
1.2 事業の目的	4
1.3 事業の実施期間	4
1.4 事業内容の概要	4
1.5 事業の実施体制	4
2. 教育課程の検討：養成講座カリキュラムの拡充の検討	7
2.1 日本語教育専門家養成講座カリキュラム検討委員会	7
2.1.1 2018年度・2019年度の養成講座カリキュラム検討委員会構成員	7
2.2 関西大学外国語教育学研究科「日本語教育専門家養成講座」	7
2.2.1 概要	7
2.2.2 科目	8
2.2.3 教育実習	8
2.2.4 受講生の状況	8
2.3 養成講座カリキュラム検討の過程	8
2.4 成果と課題	9
3. 教材の検討・開発：日本語教育実習生のための教材の開発	11
3.1 日本語教育実習生のための教材開発委員会	11
3.1.1 2018年度・2019年度の教材開発委員会構成員	11
3.1.2 具体的な教材の検討・開発方法	11
3.2 2018年度試作教材の検討・改善	12
3.2.1 教材の試用方法	13
3.2.2 教材の改善に向けて：実習生とのインタビューおよび教材開発委員会での検討から	27
3.3 2019年度改訂版教材の検討・改善	28
3.3.1 試作教材から改定版教材への修正箇所	28
3.3.2 改訂版教材の検討：実習生とのインタビューから	29
3.4 改訂版教材のさらなる改善点：最終版の完成	30
4. 養成の実施	32
4.1 日本語教育専門家養成講座モデル・カリキュラムの実施	32

4.1.1	日本語教育専門家養成講座モデル・カリキュラムの中核構成員	32
4.1.2	日本語教育専門家養成講座の内容	32
4.1.3	教育実習の内容：「日本語教育特別実習」（2単位）	33
4.2	2018年度の養成講座：リレー講義	33
4.2.1	リレー講義の担当講師と講義内容	33
4.2.2	リレー講義の評価：受講生のアンケート調査回答から	38
4.3	2019年度の実習における教育的効果	42
5.	その他の取り組み：地域日本語教育への関わりの検討	45
5.1	外国語教育・多言語交流センター（仮称）設置構想委員会	45
5.1.1	2018年度・2019年度の設置構想委員会構成員	45
5.2	取り組みの目標	45
5.3	取り組みの内容	46
5.4	取り組みの成果	46
5.5	今後の課題	46
6.	事業全体の評価	48
6.1	「日本語教育専門家養成講座」の見直し・拡充の成果に対する評価委員会	48
6.1.1	2019年度の評価委員会構成員	48
6.2	事業の成果	48
6.2.1	実習生のための教材の開発について	48
6.2.2	養成講座モデル・カリキュラムの実施について	49
6.2.3	その他の取り組み（地域日本語教育への関わり）について	49
6.3	今後の課題	49
付	録	51
A.	会議の記録	52
B.	見学等の記録	54
C.	リレー講義受講生へのアンケート調査	55
D.	2019年度教壇実習での教育実習生作成の資料	57

1. 事業の概要

ここでは、事業の概要を述べる。

1.1 事業の名称

関西大学大学院外国語教育学研究科「日本語教育専門家養成講座」の見直し・拡充委員会の開催

1.2 事業の目的

本事業は、関西大学大学院外国語教育語学研究科の「日本語教育専門家養成講座」を、文化庁報告（『日本語教育人材の養成・研究の在り方について（報告）』）に示された教育内容に基づいて、改善・発展させることを目的とするものである。

1.3 事業の実施期間

本事業は、2018 年度に採択され、同年度内の完結を目指していたが、一部検討課題が残されたため、2019 年度に再度応募・採択され、実質的に事業を継続することとなった。したがって、事業期間は 2018 年度（7 月～3 月）と 2019 年度（4 月～9 月）の計 13 ヶ月間である。

1.4 事業内容の概要

本事業の内容は大きく以下の 4 項目にまとめられる。

- 1) 教育課程の検討：養成講座カリキュラムの拡充の検討
- 2) 教材の検討・開発：教育実習生のための教材の開発
- 3) 養成・研修の実施
- 4) その他の取り組み：地域日本語教育への関わりの検討

1.5 事業の実施体制

本事業は、以下の組織・メンバーにより実施された。

1) 事業全体

嶋津百代（関西大学外国語学部准教授）

高梨信乃（関西大学外国語学部教授）

2) 日本語教育専門家養成講座カリキュラム検討委員会

高梨信乃（委員長）

嶋津百代（委員）
山崎直樹（委員、関西大学外国語学部教授）
池田真生子（委員、関西大学外国語学部教授）
アンドリュー・バーク（委員、関西大学外国語学部教授）
竹内理（委員、関西大学外国語学部教授）
守崎誠一（委員、関西大学外国語学部教授）
日高水穂（委員、関西大学文学部教授）
池田佳子（委員、関西大学国際部教授）
古川智樹（委員、関西大学国際部准教授）
當作靖彦（助言者、カリフォルニア大学サンディエゴ校教授）

3) 日本語教育実習生のための教材開発委員会

嶋津百代（委員長）
高梨信乃（委員）
阿南順子（委員、関西大学外国語学部教授）
山崎直樹（委員）
アンドリュー・バーク（委員）
金孝卿（委員、早稲田大学日本語教育センター特任准教授）
櫻井直子（委員、ルーヴェン大学日本学科講師）

4) 外国語教育・多言語交流センター（仮称）設置構想委員会

嶋津百代（委員長）
高梨信乃（委員）
池田真生子（委員）
今井裕之（委員、関西大学外国語学部教授）
竹内理（委員）
山崎直樹（委員）
アンドリュー・バーク（委員）
守崎誠一（委員）
岡田敦（委員、吹田市教育委員会学校教育部指導室主幹指導主事）
林詩（委員、吹田市国際交流協会職員）

5) 「日本語教育専門家養成講座」の見直し・拡充の成果に対する評価委員会

高梨信乃（委員長）

嶋津百代（委員）
山崎直樹（委員）
池田真生子（委員）
アンドリュー・バーク（委員）
竹内理（委員）
守崎誠一（委員）
今井裕之（委員）
奥田純子（委員、コミュニケーション学院学院長）
神吉宇一（委員、武蔵野大学大学院准教授）

2. 教育課程の検討：養成講座カリキュラムの拡充の検討

2.1 日本語教育専門家養成講座カリキュラム検討委員会

本事業の各取り組みを統括する組織として「日本語教育専門家養成講座カリキュラム検討委員会」を設置した。実施期間は、1年目は2018年7月19日より2019年1月31日まで、2年目は2019年4月1日より9月30日までであった。

2.1.1 2018年度・2019年度の養成講座カリキュラム検討委員会構成員

高梨信乃（委員長）

嶋津百代（委員）

山崎直樹（委員）

池田真生子（委員）

アンドリュー・パーク（委員）

竹内理（委員）

守崎誠一（委員）

日高水穂（委員）

池田佳子（委員）

古川智樹（委員）

當作靖彦（助言者、カリフォルニア大学サンディエゴ校教授）

本委員会は、本学外国語学部・外国語教育学研究科の日本語教育担当教員に加え、英語、中国語など他言語において教師養成に関わる教員、さらに外国語学部と連携して日本語教師養成に携わる文学部と国際学部の教員などで構成された。さらに学外からは當作靖彦氏を構成員に加え、国内外の状況を見据えた大きな視点からの助言を得た。

2.2 関西大学外国語教育学研究科「日本語教育専門家養成講座」

本養成講座は以下のようなものである。

2.2.1 概要

本養成講座は2016年度より開講されている。

本研究科前期課程には現在、領域として外国語教育学領域、異文化コミュニケーション学領域、通訳翻訳学領域の3領域、専攻言語として英語、ドイツ語、中国語、朝鮮語、日本語の5言語があるが、本養成講座は、専攻する

領域・言語にかかわらず受講することができる。将来、日本語教育に関わる職に就く可能性を視野に入れ、日本語教育学に関心を持ち、日本語教育の専門知識を学び、実務に必要なスキルを身につけることを希望する者のための講座である。

2.2.2 科目

本養成講座の指定科目は、「言語と教育」分野 31 科目、「言語」分野 19 科目、「社会・文化・地域」分野 9 科目、「言語と社会」分野 6 科目、「言語と心理」分野 5 科目、「その他」分野 3 科目の計 73 科目である。これらから必修科目を含めて 26 単位を修得することを修了要件とする。

なお、必修科目は、「外国語教授方法論（日本語）」、「外国語分析論（日本語）」、「外国語教育論（文法）（日本語）」、「外国語教育教材論（日本語）」、「日本語教育特別実習」の 5 科目である。

2.2.3 教育実習

上記必修科目の「日本語教育特別実習」において教育実習を行う。

うち、教壇実習は、本学国際部主催のサマースクール（春学期）およびウィンタースクール（秋学期）における「サバイバル・ジャパニーズ」を実習の場とし、全体で 10 回程度実施する。

2.2.4 受講生の状況

本養成講座を受講し、所定の単位を取得して修了する者は、外国語教育学を専攻する者を中心に毎年度 10 名程度で推移している。専攻言語は日本語のほか英語、中国語、朝鮮語と多様である。また、日本人学生と留学生が混在している。

修了者のうち、平均すると毎年 1～2 名が日本語教育に何らかの形で従事している。

2.3 養成講座カリキュラム検討の過程

カリキュラム検討委員会の開催、および中核メンバーによる会合・協議により、以下のように検討を実施した。

- 1) 本研究科の特色である、日本語を含む多言語に共通する視座に基づく学びの提供を保持しつつ、文化庁報告で示されている教育内容を実現するために検討すべき問題や課題があるかどうかを確認した。

- 2) 大学や日本語学校などの日本語教育機関において日本語教師の職に就いている修了生へのヒアリングなどをもとに、検討すべき問題や課題を洗い出した。
- 3) 上記の2段階を踏まえて、問題点や課題を整理し、養成プログラムの改善および対応策を練った。
- 4) 3) で協議された養成プログラムの改善および対応策をまとめ、2018年度秋学期に実施する教育実習に反映させ、モデル・カリキュラムを完成させた。
- 5) モデル・カリキュラムの目指す教育内容が提供できるよう、担当講師と協議し、具体的な内容を決定した。
- 6) 2018年度秋学期にモデル・カリキュラムを実施した（詳細は、4.を参照のこと）。
- 7) 2019年度は、モデル・カリキュラムの教育効果や課題について、実習生から得られたフィードバックなどに基づき検討し、成果と課題をまとめた。

2.4 成果と課題

2018年度に上記1)と2)を実施した結果、本研究科の日本語教育専門家養成講座は、日本語教授法、教材研究、日本語学など講座の基幹となる部分については十分にカバーできており、修了生の満足度も高いことが確認できた。

しかし、その一方で、昨今の日本語教育をめぐる状況のもと、年々多様化する教育現場で生じるさまざまな事象に対応でき、かつ、そのような経験を糧にして自律的に成長を続けていける人材を育成することを目標に掲げたとき、本養成講座には、知識と経験の両面でさらに拡充すべき内容があることも示唆された。

そのため、従来の講座の内容に以下の①と②を加えて新たなモデル・カリキュラムをつくり、2018年度秋学期に実施した。

①日本語教育実習のための教材の導入（詳細は、3.を参照のこと）

②各領域の専門家による日本語教育特別実習リレー講義（詳細は、4.2を参照のこと）

①、②により、教員側としてカリキュラムが大きく改善されたという実感があり、受講生からも非常に高い評価を得ることができた。

さらに、2019年度は、①については、2018年度秋学期に試用した試作版に改訂、試用、再改訂を加え、教材として完成させた（別冊『日本語教育実習生のための教材』を参照のこと）。

一方、②のリレー講義については、事業費を講師謝金として使用することで初めて可能になったものであるため、今後、同様の教育内容を持続可能なものにするためには何らかの方策が必要である（詳細は、6.2を参照のこと）。

3. 教材の検討・開発：日本語教育実習生のための教材の開発

3.1 日本語教育実習生のための教材開発委員会

本事業では、日本語教育実習生のための教材を開発することが取り組みの1つであった。この取り組みの実施にあたっては「日本語教育実習生のための教材開発委員会」を設置した。実施期間は、1年目は2018年7月19日より2019年1月31日まで、2年目は2019年4月1日より9月30日までであった。作成した教材は、2019年度に完成させ、成果物として提出する。

以下、2018年度・2019年度の教材開発委員会の構成員、具体的な教材の検討・開発方法などを説明する。

3.1.1 2018年度・2019年度の教材開発委員会構成員

嶋津百代（委員長）

高梨信乃（委員）

阿南順子（委員）

山崎直樹（委員）

アンドリュー・バーク（委員）

金孝卿（委員、早稲田大学日本語教育センター特任准教授）

櫻井直子（委員、ルーヴェン大学日本学科講師）

本委員会は、本学外国語学部の日本語担当教員、外国語教育学研究科の日本語教育担当教員、教材開発経験のある言語教育専門の教員などで構成された。外部委員として、早稲田大学日本語教育センター特任准教授の金孝卿氏を構成員に加え、教師研修の経験やポートフォリオ評価などの幅広い知識に基づいた専門的知見を得た。また、ルーヴェン大学日本学科講師の櫻井直子氏はヨーロッパにおけるCEFRの専門家であり、本取り組みで作成する教材に対する見識高い評価が得られるため、構成員に加えた。

3.1.2 具体的な教材の検討・開発方法

関西大学外国語教育学研究科の日本語教育専門家養成講座を、2018年度の文化庁報告に照らして拡充するのに伴い、新たに質の高い内容の講座を実現させるため、「日本語教師【養成】における教育内容」の「言語教育法・実習」に該当する内容を中核として、日本語教育実習生のための教材を作成した。作成した教材の特徴は、以下の2点である。

- 1) 『日本語教育人材の養成・研修の在り方（報告）』（p.38）に示された教育実習の指導項目である 6 段階（①オリエンテーション、②授業見学、③授業準備（教案・教材作成等、④模擬授業、⑤教壇実習、⑥教育実習全体の振り返り）において使用できるもの。
- 2) 教育実習生の自律的な成長を促すポートフォリオの形式を取り入れたもの。EPOSTL（European Portfolio for Student Teachers of Languages：ヨーロッパ言語教育履修生ポートフォリオ、URL：<https://www.ecml.at/Resources/ECMLresources/tabid/277/ID/51/language/en-GB/Default.aspx>）および、J-POSTL（言語教師のポートフォリオ：英語教職課程編、URL：<http://www.waseda.jp/assoc-jacetededu/JPOSTL.htm>）を参考に作成した。

教材開発は、以下の手順で行った。

2018 年度

- 1) 教材開発委員会（試作教材の執筆準備）：2018 年 8 月
- 2) 試作教材の執筆：2018 年 7～8 月
- 3) 教材開発委員会（試作教材の検討・改善→完成）：2018 年 9 月
- 4) 試作教材の試用：2018 年 9 月～2019 年 1 月
- 5) 試作教材の試用結果のまとめ：2019 年 1 月
- 6) 教材開発委員会（試作教材の評価→教材の完成）2019 年 2 月

2019 年度

- 1) 改訂版教材の準備：2019 年 2～3 月
- 2) 改訂版教材の試用：2019 年 4～7 月
- 3) 改訂版教材の試用結果のまとめ：2019 年 8 月
- 4) 教材開発委員会（試作教材の評価→教材の完成）：2019 年 8 月、9 月

3.2 2018 年度試作教材の検討・改善

本事業が開始した 2018 年 7 月には教材作成に着手し、同年 8 月と 9 月の教材開発委員会を経て、試作教材を完成させた。この試作教材は、2018 年 9 月からの秋学期に実施した教育実習期間を通して、実習生がポートフォリオとして利用して書き込んだ後、回収し、教材の改善および本事業の評価のための資料として活用した。

3.2.1 教材の試用方法

先述のように、本取り組みにおいて作成した教材は、『日本語教育人材の養成・研修の在り方（報告）』において示された教育実習の過程に沿ったものであり、実習生が教育実習の各段階において自己評価できるポートフォリオ形式を採用している。その自己評価項目のほとんどは J-POSTL から引用したものであるが、教育実習の過程に適合するように順序を変え、また、日本語教師養成であることを考慮し、原本の表現や文言も合わせて変更している。

以下、教育実習の各段階で目指したこと、そして実習生がポートフォリオとして書き込んだ実例を紹介する。

①オリエンテーション

教育実習の最初の段階であるオリエンテーションでは、「過去の外国語（日本語）学習経験」を振り返り、良かった内容あるいは良くなかった内容を書き込み、授業中に実習生間でディスカッションする。また、教育実習への目標や、教育実習に臨む前の期待や不安などについても書き込めるようになっている。

このオリエンテーションで重要視したのは、まず、必要とされる「教師の資質・能力」を「知識」「技能」「態度」に分けて自ら考え、文化庁『日本語教育人材の養成・研修の在り方（報告）』で示されている「日本語教師【養成】に求められる資質・能力」を確認し、そして実習生同士で話し合うことであった。

I. オリエンテーション

1. 過去の外国語(日本語)学習経験

記入日: 2018年9月5日(曜日)

1.1 これまで外国語(「外国語としての日本語」を含む)を学んできたことを振り返り、良かった、あるいは良くなかったと思う教え方や授業内容などを自由に記述してください。

a) 良かった内容

- ・何度も音読の繰り返しがあったこと
- ・大学入試を突破する上で、文構造を徹底的に教えてもらったこと
- ・単語の小テストが毎回あったこと
- ・目的に合ったプレゼンテーションの仕方も教えてもらったこと
- ・アカデミックライティングのフォーマットも教えてもらったこと
- ・ライティングのピアチェックをしたこと

b) 良くなかった内容

- ・目的が説明されないまま、ただひたすら音読をしたこと・発音のテスト問題を出すにも関わり、発音練習が全くなかったこと
- ・長文の訳読だけだったこと
- ・教科書本文の丸写しをするレポート作成
- ・ライティングの構造を説明しないライティング練習
- ・ディクテーションをさせるだけのリスニング練習
- ・スピーキング練習が一切なかったこと

1.2 学習者ではなく教授者として、1.1 で記述した内容をどう思いますか。実習生同士で話し合ってみましょう。

2. 教育実習に向けての目標

記入日: 2018年9月5日(火曜日)

日本語教師養成講座(日本語教育関連科目の授業や教育実習など)を通して何ができるようになりたいですか。

・学習者の学習目的に合った実践ができるようになりたいです。

そのために、学習者のニーズ分析と日本語レベルを適切に測れるようになりたいです。
また、その学習者の目的に合わせてカリキュラム設計や教材作成ができるようになるとともに、授業内の予測不可能なことに対応できるような日本語の知識と柔軟性を身につけたいです。

3. 教壇実習に臨む前の期待と不安

記入日: 2018年9月5日(火曜日)

a) 教壇実習で楽しみにしていることは何ですか。

- ・1からカリキュラム作成を行うこと
- ・1人ではなく、他の受講生と作業ができること
- ・チームワークをすること

b) 教壇実習で不安に思っていることは何ですか。

- ・初級学習者が何を知らなくて、何ができるのかわからないこと
- ・ひらがななどの文字指導
- ・非漢字圏の学習者への漢字指導
- ・自身の文法知識

4. 教師の資質・能力

記入日: 2018年9月5日(火曜日)

4.1 日本語教師として大切な資質・能力は何だと思いますか。「知識」「技能」「態度」に分けて挙げてみましょう。

	項目
知識	・文法や語彙に関する知識 (違いを説明するのに十分な知識)
技能	・学習者の学習の目的に合わせ、教授法を選んだり、教材を作ったりすること ・適切な例文をすぐに挙げる事ができること ・学習者の唐突な質問に対して、納得できる説明ができること
態度	・自身の実践を振り返る省察の態度 ・学習者の気持ちを理解する態度

②授業見学

教育実習のできるだけ早い段階で、日本語授業を見学し観察した点を記述しておくことは、その後の授業準備や模擬授業、教壇実習に多大な影響を及ぼす。そのため、本学の教育実習でも、留学生対象日本語授業の担当教員の協力を得て、実習生は少なくとも2回の授業見学を行った。

授業見学の前に、これまで日本語教育専門家養成講座で提供されている授業科目で学んだ知識を用いて、以下の項目を確認するようにした。

- 見学予定の授業を支えているカリキュラム・デザインやコース・デザインについて理解している。
- 見学予定の授業のシラバスの内容、および見学する授業の全体における位置づけについて理解している。
- 見学予定の授業の受講生のバックグラウンドをはじめとして、授業見学にあたり、事前に知っておく必要のある事柄を理解している。
- 授業見学にあたって、観察の視点を明確にできる。

留学生のように、自分自身が日本語授業を受講した経験がある場合を除き、日本語授業を見学したことのない実習生がほとんどであったため、授業見学で観察すべき点を、教師の行動と学習者の行動に分けていくつか挙げた。

<教師の行動：（例）授業構想、授業展開、指導法>

- 場面や目的に応じたフィードバックや声がけはどのように行われているか。
- 個人学習やペア学習、グループ学習などの様々な活動形態はどのような目的のもとに行われているか。
- 学びの振り返りはどのように行われているか。

<学習者の行動：（例）アウトプット、インターアクション>

- 授業活動の目的を理解しているか。
- 自発的・主体的にアウトプットする機会を作っているか。

授業見学後、観察した内容、注目した点や気づいた点を他の実習生と共有するようにした。そして、授業見学の成果や、他の実習生とのディスカッション結果を踏まえ、今後行う模擬授業や教壇実習で採り入れたい点を具体的に記述する項目も設けた。

授業見学の記録（1回目）

1. 授業について

日時	クラス		担当教員
2018 年 11 月 14 日 (水)	レベル： 日本語レベル 1	時間：9:00～10:30	
テキスト：独自教材	学習者： N5 の交換留学生（国籍：ドイツ、中華圏、欧米圏など）		
学習目標（指導項目） 漢字：小・男・女 文法：どんな N、よく / だいたい / 少し / あまり / 全然、どうして、S から C			
時間	観察	感想・考察	
10 分	1. 語彙と漢字に関するクイズ 教師は、1 枚目が終わった人のクイズを回収し、2 枚目を渡していた。学習者は、黙々と取り組んでいた。	1 枚終わるごとにクイズを回収しているのは、2 枚まとめて渡してしまうと学習者がだらだらと書いてしまい、テストの時間が長引くからだと考察した。また、そうすることで、学習者の理解の程度を見取ることができるのではないかと思った。	
10 分	2. 小・男・女の練習 読み方と書き順の確認をしていた。教師は、1 画ずつ矢印で示していた。読み方の確認では、音読みと訓読みに分けて確認していた。	このクラスの学習者にとって、書き順や音読み・訓読みの理解はどれくらい重要な点か疑問に思った。学習者は、読み方はひらがなで、意味は母国語でメモしており、文字の使い分けが興味深かった。	
10 分	3. 書く練習と答え合わせ 学習者は、習った漢字の書く練習をし、その後教師と共に答え合わせをしていた。	書く練習をする練習シートには、書き順が書かれておらず、書き順がめちゃくちゃな学習者がいた。練習シートにも書き順が書かれていれば良いと思った。	
10 分	4. 新出語彙の導入と音読、文法 教師は、パワーポイントを用い、新出語彙を導入し、学習者と共に発音していた。その後、文法の説明をし、例文を挙げながら学習者に質問をしていた。	新出語彙とともに、例文を提示し、学習者にたくさん質問をしていた。適宜、英語の説明も加わり、学習者はそれによって納得しているようだった。特に、「だいたい」「少し」などは、実際に身近なことを質問して、あてはまるものに手を挙げさせることで理解を深めているようだった。	

30 分	5. ペアワーク 学習者は、習った表現を使ってクラスメートにインタビューをしていた。	新出文法に関しては、日本語ではわからないが、英語で説明すると理解できる学習者が多いようだった。
5 分	6. 次回の授業 次回の授業がお休みであることを伝え、授業が終了した。	日にちの確認など、大切なことは英語でホワイトボードに書き、説明も英語でしているのが印象的だった。

2. 指導方法の工夫などについて（ICT 活用、人材（TA、ビジター）活用など）

ICT 活用では、パワーポイントを使用されていた。漢字の学習では、書き順が分かるように、ゆっくり一画ずつ漢字が提示されていた。

人材活用としては、TA が 1 名入っており、ハンドアウトを配布やクイズの丸つけをしたり、適宜、留学生の質問に答えたりしていた。授業内では、テストを 2 枚分やったり、ペアワークが多かったりするため、TA の存在が欠かせないと思った。また、学習者のレベルは N5 と事前に聞いていたが、実際にペアワークに参加してみて、想像以上にサポートが必要なレベルだと感じた。日本語レベルの差があまりない学習者同士でペアワークをするのは、とても大変だと感じた。

先生も、「日本人が多ければ多いほど良い。」と授業後おっしゃっており、日本人学生の人材活用は必須だと思った。

3. 授業全般を通じた意見や感想など

留学生は、半期の交換留学ということもあり、とてもリラックスした様子で勉強していた。クイズや書く練習を見ていると、得意不得意が明確にわかったが、みんな前向きに勉強しているのがわかった。ペアワークでも、日本語がわからない時は英語で説明すると、意味を調べながら答えていた。話す活動の方が積極的なように見えた。

先生は、教える時に想像以上に英語を使われていたのが印象的だった。語彙や文法の説明の時に、たくさんの例を挙げられていたが、ほぼ全てに対して英語での説明を加えていた。また、留学生が英語で遅刻した事情を説明したり、英語で質問したりするのにも対応されており、交換留学生に対して、どれくらい英語の介入が必要なのか勉強になった。

4. その他、特別に印象に残ったことなど

留学生にとってひらがな以上にカタカナが難しいことが印象的だった。名前を書くときに、「ひらがな or カタカナ？」と聞かれ、「カタカナ」と答えると、ゆっくり思い出しながら考えて書いていた。また、先生がクラス全体に、「カタカナが分かりますか？」と聞くと、「少し」「あんまり」と答える留学生が多かった。ひらがなさえ読んで書ければ基本的な意思疎通ができるため、カタカナの学習に対する意識はそこまで高くないのかもしれないと思った。

教育実習の③授業準備から、活動の前後における自己評価を書き込むポートフォリオ形式になる。③授業準備、④模擬授業、⑤教壇実習の段階で自己評価する項目は、J-POSTL で用いられているものを引用したが、各段階で必要だと考えられる項目を適宜選択した。自己評価の仕方は、③授業準備の最初のページに説明を加えた。

Ⅲ. 授業準備

1. 模擬授業を行う前に、以下の項目を確認しながら、授業準備に臨みましょう。
2. 授業準備を行った後に、自己評価をしましょう。
3. なぜそのように自己評価したのかを空欄に記述してください。また、気づいたことや気になったことなども記述してください。

	年/月/日	1	2	3	4	5
①						
②						

- ①は授業準備前の確認です。5段階で評価して✓しましょう。
- ②は授業準備後の自己評価です。5段階で評価して✓しましょう。
- 評価の理由は、授業準備をした後に書いてください。

以下、③授業準備、④模擬授業、⑤教壇実習の試用例を提示する。

③授業準備

A. 学習目標の設定

1. 学習者のニーズと興味・関心を考慮し、コースカリキュラムに沿った学習目標を設定できる。

	年/月/日	1	2	3	4	5
①	2018. 12. 3				✓	
②	2018. 12. 10			✓		
最終目標に到達できるような目標は立てられたと思う。しかし、学習者の日本語レベルやニーズが不透明な部分もあるため、今後改良が必要だと思う。						

2. 学習者の意欲を高める目標を設定できる。

	年/月/日	1	2	3	4	5
①	2018. 12. 3			✓		
②	2018. 12. 10			✓		
今立てている目標は面白みに欠けると思う。学習者が実際に入店してこたり、「そういうのあるある」という場面を想定して、改良したい。						

3. 学習者の学習の振り返りを促す目標を設定できる。

	年/月/日	1	2	3	4	5
①	2018. 12. 3			✓		
②	2018. 12. 10			✓		
目標に対して授業内容がシンプルなので、振り返りはしやすいと思う。しかし、今後、授業内容を改善する際に、振り返らせないといけないことについて目標設定をしたい。						

4. コースカリキュラムに基づいて、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能それぞれに観点別評価の目標を設定できる。

	年/月/日	1	2	3	4	5
①	2018. 12. 3			✓		
②	2018. 12. 10				✓	
「書くこと」以外の3つの技能について評価目標を設定する。今後、活動を考える時に、観点別評価も変更したいと思う。						

④ 模擬授業

IV. 模擬授業

1. 理論を理解して、自分の授業を批判的に評価できる。

	年/月/日	1	2	3	4	5
①	2018. 12. 3				✓	
②	2018. 12. 11				✓	
現段階では、ボトムアップ式の授業になっていると思う。今後は積み上げ式にもっと表出できるような活動を考えてい。						

2. 学習者からのフィードバックや学習の成果に基づいて、自分の授業を批判的に評価し、状況に合わせて変えることができる。

	年/月/日	1	2	3	4	5
①	2018. 12. 3				✓	
②	2018. 12. 11				✓	
実習がセットになった際には、学習者と良好な関係性を築き、彼此的なフィードバックをもらえるようにしたい。						

3. 他の実習生や指導教員からのフィードバックを受け入れ、自分の授業に反映できる。

	年/月/日	1	2	3	4	5
①	2018. 12. 3					✓
②	2018. 12. 11					✓
もらったフィードバックを活かし、計画を練り直したい。その上で、他の実習生と内容の相合わせていきたい。						

4. 他の実習生の授業を観察し、建設的にフィードバックできる。

	年/月/日	1	2	3	4	5
①	2018. 12. 3					✓
②	2018. 12. 11					✓
授業がより良くなるようなフィードバックができたと思う。						

⑤教壇実習

V. 教壇実習

A. 授業運営

1. 学習者の関心を引きつける方法で授業を開始できる。

	年/月/日	1	2	3	4	5
①	2019 / 1 / 24			✓		
②	2019 / 1 / 26				✓	

1回目の授業は、導入について考える予定があまりなかった。2回目ではテーマが「味」だったのと、少し気持ちの余裕ができたので、導入と工夫することができた。

2. 教案に基づいて柔軟に授業を行い授業の進行とともに学習者の興味関心に対応できる。

	年/月/日	1	2	3	4	5
①	2019 / 1 / 24					✓
②	2019 / 1 / 26					✓

初日の受講者の様子を見て、指導内容と変えることができた。2回目の指導内容も違う教師が作ったものだったが、目的やフラスに合わせて変更を加えることができた。

3. 学習者の集中力を考慮し、授業活動の種類と時間を適切に配分できる。

	年/月/日	1	2	3	4	5
①	2019 / 1 / 24			✓		
②	2019 / 1 / 26				✓	

1回目は予定より15分くらい早く内容が終わってしまった。宿題に出したものをやってもらったが、代わりに何か活動を準備していればよかった。

4. 指導内容をまとめてから授業を終了することができる。

	年/月/日	1	2	3	4	5
①	2019 / 1 / 24				✓	
②	2019 / 1 / 26			✓		

1回目の授業では数字の言い方を何度もくり返して、言えるようにはなったが、いくつか確認できた。2回目は授業内ではいいが、宿題を出して表現を使えるようには、なかなか確かめられた。

⑥全体の振り返り

教壇実習が終了した後、実習生が教育実習の過程全体を振り返って、以下の質問に答えるため、教材に記述できるようにした。

- 1) 「オリエンテーション」2 で設定した「教育実習に向けての目標」は、教育実習を通して、どの程度達成できたか。
- 2) 「オリエンテーション」4.1 および 4.2 を振り返り、教師の資質・能力に関して、教育実習を通して新たに気づいたことや理解したことがあるか。

VI. 全体の振り返り

1. 「オリエンテーション」2 で設定した「教育実習に向けての目標」は、教育実習を通して、どの程度達成できましたか。以下に、自由に記述してください。

学生からの予期せぬ質問や発言に即座に対応できるような、
な、たと思う。

また、他の4名と協力して、カリキュラムを作り、教材を修正する
ことができたと思う。

2. 「オリエンテーション」4.1 および 4.2 を振り返りましょう。ここで挙げられている教師の資質・能力に関して、教育実習を通して新たに気づいたことや理解したことがありますか。他の実習生と話し合ひましょう。

自分も俯瞰し、良いところは大いに授業に活かし、足りない部分は
改善し、何かで補う力が必要だと思った。1人1人教え方は
違ふけれど、教師には普遍的な役割があると思う。その役割を
演じるために自身の長所、短所に自覚的であるべきだと思った。

なお、4.で説明するが、2018 年度はリレー講義を実施したため、講義後の感想や意見などを記述する箇所も設けた。

リレー講義について①

氏名： XXXXXXXXXX

日時：11/14（水）	講師：神吉宇一
講義タイトル：日本における外国人受け入れ政策および在留外国人の現状と課題	
講義内容： 訪日外客数は年々大きく増加しており、また、在留外国人も半数が永住者・特別永住者となっています。日本政府は、2018 年 6 月に発表したいわゆる「骨太の方針」で、今までの外国人受け入れ政策を転換し、「高度人材」以外も積極的に受け入れる方針を示しました。実質的に「移民政策」が進んでいると言えるでしょう。本講座では、政策的な動きと日本国内の在留外国人の現状、地域社会の課題について、事例を元に考えて行きます。 神吉先生のお話を拝聴し、今後の日本語教育においては、語学教師としての日本語教師ではなく、在留外国人が日本で生活をしていくための生活支援や異文化教育、そして日本人と外国人のコミュニティを築いていけるような日本語教師が求められていくのだろうと思った。今回、特に印象に残ったお話が 2 つある。 1 つは、「移民」という言葉を使うと反対意見が起こるという話だ。これは、日本社会が、いかに在留外国人によって支えられているか、日本人に認知されていない結果だと感じた。普段、大学院で勉強していると、留学生のいない生活や外国人と全く接触しない環境は想像しがたい。しかし、そのような在留外国人との直接的な関わりがある人は、地域や職業で限定されており、その結果が「移民」という言葉への敏感さに表れていると思った。多くの日本人の場合、映画『杜鰍工場』のような、よく考えると誰がやっているか知らないような労働において、間接的に在留外国人の恩恵を受けているのではないかと思った。「自分は、外国人が少ない地域に住んでいるから関係ない。」と言える生活はもはや存在しておらず、今後は、外国人の高度人材運用が始まるに伴い、より直接的な在留外国人からの恩恵を受ける生活が目前に迫っているのだと感じた。そのことを受け入れ側である日本社会は深く理解し、相応の政策や対策を準備する必要があると思った。そのような状況下で、日本語教師の果たす役割は大きい。日本語教師は、在留外国人と日本社会の両方の実態を知っていることを活かし、その架け橋にならないといけないと思った。 2 つ目に印象深かったのは、日本語教師の資格に関するお話だ。私は、自身の研究テーマが教員養成や教師教育に関するものであるため、英語を中心とした外国語教師の教師教育と照らし合わせながら聞いた。外国語でもそうだが、なぜ、学習者に教える内容や指針が先に決まって、教員養成に関する指針が後から出てくるのか疑問だった。冷静に考えると、教員を育てるには時間が必要で、学習者に対する指針が施行されたとしても、それを施す教師が養成されていないと意味がないからだ。神吉先生には、先に教育に関する法案が成立しないと、教員養成の予算が付かないから、と答えいただき、なるほどと納得した。確かに、行政や国民を納得させるためには、法律の成立が先になると思うと同時に、	

3.2.2 教材の改善に向けて：実習生とのインタビューおよび教材開発委員会での検討から

教育実習の過程がすべて終了した学期末、各実習生（2018年度は大学院生4名が対象）に対してインタビューを行った。このインタビューは、実習生自身の「日本語教育特別実習」全体に対する振り返りと、担当教員のフィードバックを中心に、実習生1人につき30分程度行った。その際、教材を試用する中で気づいたことなどについても質問し、実習生からコメントを得た。

以下、インタビューの中で明らかになった教材に関する意見についてまとめる。

- 授業準備から教壇実習までの段階で自己評価する際に、活動前の評価と活動後の評価をどのタイミングで行えばいいのかイメージするのが難しかった。実際には活動が終わってから、活動前を思い出して評価することもあった。
- 授業実施後は評価しやすかったが、授業実施の前にもっと見ればよかった。
- やっていくうちに自信がなくなって、評価が下がっていったところがあった。
- 同じような文言があってややこしいと思ったところあり。
- 教壇実習で教える学習者に関する情報が不足していて評価しにくい点もあった。
- ポートフォリオなので実習生の主体性に任されているが、担当教師のワンプッシュがほしい場面もあった。
- 空欄に具体的な内容を書く余裕がなかった。
- 教育実習の具体的な活動と直接かかわらないように見える項目があった。

また、教材開発委員会から得たコメントは以下の通りである。

- 自由記述欄にコメントを書いていないケースが多いので、改訂版は表に工夫を加え修正した方がよい。
- 現状の表では、実習生が1から5の段階評価をどのように捉えていたか、また実際にそのように評価したプロセスがわからないため、試用した実習生からインタビューで理由などを聞き取る必要がある。

以上、2018年度はほぼ構想した通りの内容で教材を試作したが、実習生

や教材開発委員会の意見やフィードバックを取り入れて、さらにより良い改善を目指し、引き続き 2019 年度に改訂版教材を試用することにした。

3.3 2019 年度改訂版教材の検討・改善

2018 年度に作成した教材を試用した実習生からのフィードバック、および教材開発委員会での評価を得て、2019 年 2 月～3 月に教材の改訂版を作成した。（なお、2018 年度で実施したリレー講義は 2019 年度の養成課程では行わなかったため、改訂版では記録のページを削除した。）

改訂版教材は、2019 年度春学期の「日本語教育特別実習」において試用した。本科目を受講した実習生 8 名が、2018 年度同様、教育実習の 6 段階において教材を用いた。

3.3.1 試作教材から改定版教材への修正箇所

改訂版では、③授業準備の段階で評価の仕方についての具体的な説明を加え、さらに④模擬授業や⑤教壇実習の最初にも若干の説明を加えた。以下、修正した箇所を提示する。

Ⅲ. 授業準備

1. 模擬授業の準備を行う前に、次ページ以降の各項目を確認して、表の①に 5 段階で自己評価して✓しましょう。そして、下の空欄にそのように評価した理由を記述してください。
2. 授業準備を行った後に、表の②に 5 段階で自己評価して✓しましょう。①同様、空欄には、なぜそのように自己評価したかを記述してください。
3. また、気づいたことや気になったことなども、自由に記述してください。

	年/月/日	1	2	3	4	5
①						
②						

- 5 段階評価の目安は、以下を参考にしてください。
 - 1: 全くできない
 - 2: あまりできない
 - 3: 普通
 - 4: できる
 - 5: よくできる

IV. 模擬授業

1. 模擬授業を行う前に、次ページ以降の各項目を確認して、表の①に 5 段階で自己評価して✓しましょう。そして、下の空欄にそのように評価した理由を記述してください。
2. 模擬授業を行った後に、表の②に 5 段階で自己評価して✓しましょう。①同様、空欄には、なぜそのように自己評価したかを記述してください。
3. また、気づいたことや気になったことなども、自由に記述してください。

V. 教壇実習

1. 教壇実習を行う前に、次ページ以降の各項目を確認して、表の①に 5 段階で自己評価して✓しましょう。そして、下の空欄にそのように評価した理由を記述してください。
2. 教壇実習を行った後に、表の②に 5 段階で自己評価して✓しましょう。①同様、空欄には、なぜそのように自己評価したかを記述してください。
3. また、気づいたことや気になったことなども、自由に記述してください。

3.3.2 改訂版教材の検討：実習生とのインタビューから

2018 年度秋学期同様、2019 年春学期においても、2018 年度秋学期同様（詳細は 3.2 参照）、教育実習の過程がすべて終了した学期末、各実習生にインタビューを行い、教材に関する意見やフィードバックを得た。2019 年度は教育実習を履修した 8 名が対象となった。

以下、インタビューの中で明らかになった教材に関する意見についてまとめる。

- 項目の量が多く、記述するのが大変だった。
- 実際に行った教壇実習で扱わなかった内容や関連しないものがあったため、どう自己評価すればいいか迷った。
- そこに書かれている内容を目標にすると、実際に模擬授業や教壇実習に反映できるのかどうか、どのように授業計画に盛り込めばいいのか、わからなかった。
- 「～できる」という表現で考えられるのが難しかった。
- 項目の中には、具体的にどうしたらいいのかわからないものがあった。
例：「学習者の意欲を高められる」

- 5段階のスケールを選択して自己評価する際、経験がないものには低いスケールをつける傾向があった。また、「できる」と思った項目のコメントは似たものになってしまった。
- 全体像が見えにくかったので、目次か一覧表があるとわかりやすい。
- 模擬授業や教壇実習の章で、先生（実習担当教員）のコメントを書く欄があってもよかった。
- 「できない」と思ったことを「できる」ように、実習に採り入れることができなかった。

3.4 改訂版教材のさらなる改善点：最終版の完成

実習生からのフィードバックおよび2019年度最終の教材開発委員会での議論を踏まえ、以下の点を最終版に反映させ、2019年9月最終版教材を完成させた。

- 1) 前書きに、使用する際の留意点を記述する。
- 2) 全体像が把握できるように、目次をつける。
- 3) 学習者を知るための質問項目を記述する欄を加える。
- 4) 模擬授業や教壇実習の章に、担当実習教員のコメントやフィードバックを記述する欄を追加する。

上記のうち、特に1) について説明を加えておく。

本事業がカリキュラムの検討・見直しの対象としたのが、本学の外国語教育学研究科の日本語教育専門家養成講座であり、本講座が提供する教壇実習は国際部主催のサマースクールおよびウィンタースクールで行う。この日本語授業が目標としているのは「サバイバル・ジャパニーズ」の習得であって、いわゆる技能型カリキュラムではなく、4技能に特化した実践を行うものではない。そのため、教材の大部分を依拠したJ-POSTL作成のポートフォリオの文言や内容と、実際の教壇実習で必要とされる能力記述で合致しないものが多かった。2学期間にわたる試用では、実習生の反応や感想を得るため、実習と合致しない項目であってもそのまま教材に残した。

したがって本教材は、それぞれの教育実習のカリキュラムに合わせて、実習生が自己評価する項目を選択することが必要になろう。実習担当教員が、それらの項目を事前選択することも可能であろう。

また、2019年度最後の教材開発委員会において議論された以下の点は、

教材の最終版には反映させなかったが、今後の課題として挙げておく。

- ポートフォリオは、自己評価の理由を記述してこそ内省につながるため、前後の変化も実習生が意識化していけるもの、かつ言語化できることにつながるものが理想である。
- 教育実習の前段階で、養成講座が提供する「教授法」などの授業科目で学ぶ内容と関連づけさせるセクションがあってもよい。そうすることで学びの記憶を想起させ、かつ定着させ、さらに実践に応用・活用させたりすることができるであろう。
- 2018 年度のリレー講義の代替になるような、外部の研究会や講演会などに参加し、その報告を書き留めておくセクションを入れる。自律的で主体的な学びの在り方の提案とする。

4. 養成の実施

4.1 日本語教育専門家養成講座モデル・カリキュラムの実施

関西大学外国語教育学研究科日本語教育専門家養成講座のモデル・カリキュラムの実施は、本事業の主要な取り組みみであった。実施期間は、1年目は2018年10月1日～2019年1月31日まで、2年目は2019年4月1日から7月31日までである。この事業の目標に据えたのは、従来の日本語教育専門家養成講座カリキュラムの拡充と向上を図り、新たなモデル・カリキュラムを実施し検証することであった。以下、モデル・カリキュラムの内容について詳細を説明する。

4.1.1 日本語教育専門家養成講座モデル・カリキュラムの中核構成員 2018年度・2019年度

関西大学外国語学部/外国語教育学研究科 教員

嶋津百代 准教授：日本語特別実習（教師教育論）

高梨信乃 教授：日本語特別実習（日本語教育文法）

阿南順子 教授：日本語特別実習（日本文化）

4.1.2 日本語教育専門家養成講座の内容

本事業が対象とする、大学院の日本語教育専門家養成講座は、教授方法論や教育教材論などの日本語教育に特化した指定科目が開講されている。より充実した教育内容を提供するため、本事業によって実施した取り組みを、以下に挙げる。

- 1) カリキュラム検討委員が作成するモデル・カリキュラムに基づき、また、これまで提供されていなかった分野、例えば「日本語教育に関連する言語政策」「地域日本語教育」「年少者日本語教育」など、各分野の専門家に協力を依頼し、講義内容の充実を図る。
- 2) 本事業の教材開発委員が文化庁報告の教育内容を取り入れた教材を開発し、日本語教育実習生とともに検証することで、自律的に学び成長し続けることのできる日本語教師の育成を目指す。
- 3) 本研究科の英語教育教員らが注力してきた地域連携を強化した教師養成にも取り組む。例えば、授業見学に、従来の外国人留学生対象の日本語授業に加え、小学校の外国人児童に対する取り出し授業の見学、地域ボランティア日本語教室の見学を含める。

4.1.3 教育実習の内容：「日本語教育特別実習」（2単位）

先述のように、日本語教育専門家養成講座を修了するためには、必須科目を含む指定科目を26単位履修する必要がある。その内、教育実習にあたる「日本語教育特別実習」の2単位を取得しなければ、養成講座の修了が認められない。「日本語教育特別実習」の最終段階で行われる教壇実習は、本学国際部主催のサマースクール(春学期)およびウィンタースクール(秋学期)における「サバイバル・ジャパニーズ」を実習の場とし、計10回程度実施する。

関西大学外国語教育学研究科修士課程の院生で「日本語教育特別実習」を受講した学生は、2018年度は4名（日本語ネイティブ3名、日本語ノンネイティブ1名）、2019年度は8名（日本語ネイティブ4名、日本語ノンネイティブ4名）であった。

この「日本語教育特別実習」は、文化庁の『日本語教育人材の養成・研修の在り方』に即した教育実習の6段階に沿って授業が進められた。2018年度秋学期と2019年春学期の両学期とも計15回の授業が行われた。通常、第1回から第5回までの授業は講義と活動が中心で、第6回から第15回までの10週間は実習生による模擬授業とその振り返りに充てられている。

4.2 2018年度の養成講座：リレー講義

2018年度は、本学の日本語教育専門家養成講座が提供している日本語教育関連の授業科目の他に、2018年11月14日から2019年1月23日の期間において、国内外から講師を迎え、リレー講義を実施した。

先述のように、このリレー講義は、これまで本学の養成講座で提供されていなかった分野、例えば「日本語教育に関連する言語政策」「地域日本語教育」「年少者日本語教育」など、各分野の専門家に協力を依頼し、本養成講座の講義内容の充実を図る試みであった。同時に、この試みを通して養成講座の課題を明らかにすることが目的であった。

4.2.1 リレー講義の担当講師と講義内容

2018年度に実施したリレー講義は、以下の講師が担当した。

- 金孝卿（早稲田大学日本語教育センター 特任准教授）：ビジネス日本語
- 奥田純子（コミュニケーション学院 学院長）：日本語教育事情
- 神吉宇一（武蔵野大学大学院言語文化研究科 准教授）
：言語政策・多文化共生社会論
- 佐藤慎司（プリンストン大学東アジア学科 日本語プログラムディレク

ター)：アメリカの日本語教育

- 櫻井千穂（同志社大学 日本語/日本文化教育センター 准教授（当時）、現 広島大学大学院教育学研究科）：年少者日本語教育
- 中村香苗（淡江大学日本語文学科 助理教授（当時）、現副教授）
：アジアの日本語教育
- 櫻井直子（ルーヴェン大学日本学科 講師）：ヨーロッパの日本語教育
- 山野上隆史（とよなか国際交流協会 事務局長）
：ボランティア日本語支援
- 水野マリ子（神戸大学 名誉教授）：地域日本語教育

以下は、リレー講義の日程、講義タイトルと講義概要である。

日程	講師	講義タイトルと概要
11/14(水)	神吉宇一	日本における外国人受け入れ政策および在留外国人の現状と課題 訪日外客数は年々大きく増加しており、また、在留外国人も半数が永住者・特別永住者となっています。日本政府は、2018年6月に発表したいわゆる「骨太の方針」で、今までの外国人受け入れ政策を転換し、「高度人材」以外も積極的に受け入れる方針を示しました。実質的に「移民政策」が進んでいると言えるでしょう。本講座では、政策的な動きと日本国内の在留外国人の現状、地域社会の課題について、事例を元に考えて行きます。
11/21(水)	奥田純子	日本語学校における日本語教育の動向 現在の日本語学校の源流は、1983年に発表された「留学生10万人計画」にあります。当時は数校しかなかった日本語学校が、今では700校を超えています。本講座では、日本語学校の設立、社会的意味と課題を時代との関係性の中で理解しながら、そこでの「日本語学校教育」の多様なあり方を教育・学習の視点から批判的にかつ創造的に読み解いていきます。そして、受講生それぞれが、日本語学校教育にアクセスするための複眼的な観点を獲得し、自身の日本語教育の理念を見出すための一歩となることを目指します。
11/28(水)	水野マリ子	地域日本語教育—支援者のあり方 地域において外国人の日本語学習支援を行う支援者のあり方について、以下のいくつかの観点から考える。 1) 成人対象日本語教育 これまで、NPOや地域のボランティアグループによる外国人日本語教育支援は、主として成人を対象とし

		て実施されることが多かった。成人対象の支援で課題となるのは、学習者の背景が多様なことがあげられる。留学生のように学習経験を豊富に持ち、自律的に学習できるタイプから、母国で十分な教育を受ける機会も少なく、自律的な学習が困難なタイプの人までいる点である。もちろん、それらの背景により、学習目標も多様である。 2) 年少者対象日本語教育 社会人として来日する外国人数が増加するに連れて、帯同される年少者の数も増加しており、学齢期の子どもに対する日本語教育支援が急務となっている。成人対象の日本語教育と異なり、年少者への支援は、子どもの年齢や背景により、児童心理、発達心理など、幅広い知識が必要とされる。成人はおおむね自己の意志で来日しているが、年少者の多くは家族の都合で、本人の意志に関係なく連れてこられていることが多い。母国での友人関係や学習背景と関係なく、突然日本社会に移植された植物のような状況で、きちんと根を張って枝を伸ばし、花を咲かせることができるかどうかは、きわめて微妙な要素が多い。さらに、公立学校内部に設定された「日本語教室」と、地域のボランティアが運営する学外の「日本語教室」での支援のあり方は大きく異なる。 これらの観点から、「成人向け日本語教育支援」と「年少者日本語教育支援」、「公立学校での支援」と「地域での支援」等について、考える。
12/6(木)	櫻井千穂	日本国内における文化言語の多様な子どもの支援 グローバル化にともない、日本国内でも複数の文化・言語の中で育つ子どもたちが増えています。この子どもたちのことばとアイデンティティを保障するには、どのような教育・支援が必要でしょうか。バイリンガル教育理論をふまえた上で、文化言語の多様な子どもの発話事例を通して彼らの現状について理解を深めます。そして、有益な教育・支援の実践例を紹介しつつ、自分たちにできることを一緒に考えたいと思います。 もし学生さんたちが予習をされるようでしたら、以下の著書を薦めていただけますでしょうか。 中島和子（2016）『完全改訂版 バイリンガル教育の方法』アルク ただ、読んでこれなかったとしても理解できるような授業にする予定です。他の課題や学生さんたちのやる気、コースの目的等を勘案して、学生さんにお伝えいただければと思います。
12/12(水)	山野上隆史	地域に暮らす外国人から眺めた日本語教室

		地域で働く、子育てをする、学校に通う...など日本で生活する中で日本語は欠かすことができません。しかし、日本語が十分に使えない人はたくさんいます。また各地で日本語ボランティアによる教室が開催されていますが、うまく学べない・学ぶ機会がないという人もたくさんいます。本講義では、地域の日本語教育のトレンドを振り返りながら、できるだけ地域に暮らす外国人に寄り添おうとしている立場から、そこから見えることについて話をしたいと思います。 予習をしたいという学生さんには以下のものをお知らせいただければと思います。論点整理を読むだけでも何となく今の立ち位置が見えるかと思いますが、報告まで読むと少し具体的に見えると思います。 論点整理 ※全体の流れと構図がつかめます。 http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/suishin_130218.pdf 報告（実施体制）※事例です http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/hokoku_160229.pdf 報告（教員養成）※教員養成の考え http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/r1393555_01.pdf さらに余裕がある人は文化庁のHPに出ている資料をいろいろとあさってみるといいと思います。 http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/index.html
12/20(木)	金孝卿	「ケース学習」から考えるビジネスコミュニケーション教育 経済のグローバル化に伴い、日本では留学生を含む外国人材の雇用と定着を図るための政策が実施されるようになりました。日本語教育では、多文化共生社会の実現に向けて、日本語を使って働く人々のためのビジネス日本語教育や留学生のキャリア教育について考えていく必要があります。この授業では、日本人と外国人がともに働く職場での問題を事例にした「ケース学習」を体験し、ビジネスコミュニケーション教育で必要な要素について考えます。 この授業は、ケースを読んで討論に参加する体験型の授業です。講義資料は事前に提示されますので、各自その課題に取り組んだ上で授業に参加してください。授業後には「内省レポート」を書いてもらう予定です。
1/9(水)	中村香苗	台湾の日本語教育の現状と今後の展望 本講義では、国際交流基金の「日本語教育機関調査」の結果をもとに、台湾の日本語教育の現状を概説す

		る。さらに、今年度より開始される高校の新カリキュラムの改定ポイントを押さえ、それにより中等教育における日本語教育にどのような影響が出るのか、今後どんな授業や教師が求められてくるのかを論じる。また、高等教育の一例として講師の勤務校である淡江大学において、どのような日本語教育および教師養成の実践が行われているのかを紹介する。
1/16(水)	櫻井直子	学習者と社会とつなぐ授業実践—複言語主義に基づく言語教育— この授業では、欧州評議会(2001)『言語のための欧州共通参照枠 (CEFR)』の基本的な概念を理解し、欧州評議会(2018)『言語のための欧州共通参照枠：姉妹編 (CEFR companion volume)』を参照しながら、学習者と社会をつなぐ言語教育を考えます。さらに、ルーヴェン大学の日本語教育実践を具体例として示し、実際にコース構築を体験します。 ヨーロッパの言語教育理念に興味があれば事前に『日本語教師のための CEFR』(奥村、櫻井、鈴木：2016)を読んでおいていただけるといいかもしれません。
1/23(水)	佐藤慎司	アメリカの日本語教育の歴史と現状：プリンストン大学の事例も含めて 本講義では、まず、アメリカの日本語教育の歴史と現状、最近の動向などを概観する。その後、講演者がプリンストン大学で行なっている「社会参加をめざすことばの教育(佐藤・熊谷 2011)」「内容重視の批判的言語教育(佐藤・高見・神吉・熊谷 2016)」を軸とした日本語教育の実践(初級・中級・上級)を紹介する。



4.2.2 リレー講義の評価：受講生のアンケート調査回答から

2018年度のリレー講義を受講した大学院生に依頼し、アンケート調査（付録 C を参照のこと）を実施した。先述のように、リレー講義は本学の大学

院日本語教育専門家養成講座の科目を受講している大学院生にも受講を許可した。各講義 10~15 名の大学院生が参加した。

以下、アンケート調査の質問の中でも、リレー講義の評価に直接関わる質問への回答を取り上げる。なお、回答の内容はもちろんのこと、文法上の間違いもそのまま引用する。

(3) このリレー講義で、学んだことは何ですか？

- 「日本語教育」と言っても学習者の背景は本当に様々で、教師として知っておくべき事がたくさんあると感じました。
- 様々な情報や意見を取り入れ、日本語教育についての自らの考えや姿勢を明確に持ち、それを実践していくことの重要性。
- 日本語教育がすごく必要とされながら、ちゃんと受けるべき日本語教育が様々な理由で受けられていない人がたくさんいます。彼らの力になりたいと思うようになりました。
- 日本語教育の現状と多様性。オモテとウラ。
- 今後の日本語教育は単に能力を教えるだけでなく、学習者の多様化に応じて、彼らのアイデンティティを考慮する必要がある。
- 日本における日本語学習者の困難点
- 言語教育について修めたものとして、どのような場所で、どのような形で社会に学んだものを還元していくかについて学んだ。言語教育は社会的弱者に寄り添っていくことができるものだと言った。
- 日本語教育は学校内の教育だけではなく、社会生活も日本語教育の場でもある。

(4) 3) で学んだことを、今後どのように活かせると思いますか？

- 学習者の背景を考慮して授業内・外で接するようにしたいと思います。
- 実際の教育現場に立った時に、教室内の活動が教室外への実践に繋がるものを積極的に実施したいと思います。
- 地域の日本語教育支援者にまず申請したいと思います。日本語教育を専攻していない人が日本語を教えている現状を変えるには、法など公的な力が必要だとも思いました。
- 理想だけでなく現実を見て、日本語教育について考えることができると思います。
- 今後、異国の人と付き合う際に、言葉だけではなく、相手国の習慣やマナーなどの文化も頭に入れながら、行動する。

- 多様な学習者のニーズやアイデンティティの形成を考慮して、それに対応する言語教育を模索していきたい。
- 学習者の立場に立って、自分が出来る事をその都度考えながら寄り添えるようになるのではないかと、是非なりたいと思います。
- 教師という形にこだわらず、生きる術を身につけていこうとする人たちと共生していくのに活かせると思う。
- 社会に出て、身近にいる人とコミュニケーションするときは、同時に言語学習のときでもあるから、小さなことに、細かいところに気を留めよう。
- 今後、国内外で日本語教育を目指すところ、中国語教育や英語教育との共通点や相違点について考えながら、自分自身が日本語教育とどのように関わっていくべきなのかを考えていきたいと思います。

(6) このリレー講義を他の人にも勧めたいと思いますか？またその理由も教えてください。

- 日本語学校のこと、留学生の点など、様々なことについてお話を聞けるので、将来日本語教育関連の仕事をしたいという人は是非お勧めです。
- 勧めたいと思う。なかなか聞くことができない貴重なお話を聞くことができる、良い学びになると思うから。
- 講義をしてくださった方は全員現役として活躍されている先生たちなので、現場の知識と実態を知る絶好のチャンスだと思います。
- このリレー講義は外国語教育専攻以外の人でも、内容によって受けるという理由は、今後日本にいる外国人の現状や課題などへの理解を深めることができるから。
- 学校の授業で学んだ知識以外、より多様な分野の知識がもらえる。
- 現在進行形の話が多く、その課題についても提示していただいた。
- 講義内容は、日本語教育にかかわらず、全ての言語教育に通ずるお話だと思う。第一線で実践や研究をされている方のお話を聞くと、自分の実践や研究を振り返り、まだまだ成長できると思い直す機会になる。
- 学内の先生が教えない知識を学ぶことができますから、とても珍しいチャンスでした。

(7) リレー講義で今回取り上げられなかったテーマで、今後扱ってほしいテーマはありますか？

- 途上国での義務教育（小・中）における日本語教育など。

- 日本語教育を教えるのに必要な資格・資質など。
- 外国人労働者が受けている日本語授業について。
- 言語教育に関する様々な変化や改革を受けて、どのような日本語教育教材が作られているのか、教材開発に携わっている方や出版者の方のお話を聞いてみたい。
- 日本や海外における日本語教育の歴史。

(8) リレー講義を振り返って、ご感想・ご意見などありましたら、ご自由にお書きください。

- 大変勉強になりました。現場で実際に活躍されている先生方の話を聞いて、視野が広がったように感じました。この学びを今後の人生に活かしたいと考えています。
- 毎回大変興味深い内容を聞かせていただけて非常に良かった。
- 多くの分野の講義に参加し、自分の視野が広がり、研究に関する情報をたくさん手に入れた。
- 様々な分野で第一線で活躍されている方の話をたくさん聞くことができ、とてもぜいたくな経験でした。



以上のアンケート調査の回答を総括すれば、各領域の第一人者による、各現場からの生の声が聞けたリレー講義は、受講生の視野を広げ、彼らの実践や研究、学びにも大きな刺激を与えたと言える。

その中でも、特に 6) の質問に対する回答は、リレー講義を実施した成果および今後の課題として注目に値する。

- 現場の知識と実態を知る絶好のチャンス
- 日本にいる外国人の現状や課題などへの理解
- 学校の授業で学んだ知識以外のより多様な分野の知識
- 学内の先生が教えない知識

2018 年度において養成講座のモデル・カリキュラムが目指したのは、本学の養成講座で従来提供されていなかった分野の専門家に出演・協力を依頼し、講義内容の充実を図ったことである。上記の回答から浮かび上がってくるリレー講義の成果は、「(養成講座の) 授業で学んで知識以外のより多様な分野の知識」や「学内の先生が教えない知識」を得たことである。一方で、このようなコメントは、大学における日本語教師養成の今後の課題とも言える。なぜなら、各大学の教員だけで日本語教育関連分野を全て指導することは難しい。教員が提供できる専門性やカリキュラムが各大学の養成講座の特徴や個性となっているとは言え、このような回答が示唆しているのは、少なくとも日本語教師になりたいと望む学生は、多様な分野の知識を求めているということである。

4.3 2019 年度の実習における教育的効果

先述のように、2018 年度においてモデル・カリキュラムはほぼ計画通りに実施したが、その教育効果の検証がまだ十分にできていなかった。したがって、2019 年度では教育実習のオリエンテーションから全体の振り返りに至るまでのすべての段階を記録した（録画・録音・文字起こしを含む）。この記録を分析・考察する作業を 2019 年度春学期に行った。この作業によって、教育実習における実習生の学びの過程を可視化し、教師養成の状況を詳細に観察することができた。

2019 年度に教育実習を履修した大学院生 8 名は、2018 年度に養成講座の授業科目やリレー講義を受講していた。本事業での取り組みの中でも養成講座の内容の充実を図るために実施したリレー講義の教育的効果は、直接的に観察できるわけではない。しかしながら、教育実習における「授業準備」および「模擬授業」後の実習者間の討論や、学期終了後の実習生とのインタビューを分析すると、間接的に教育的効果があったと推測される内容が見受けられた。それらの内容を以下に挙げる。

- 授業で学生が少しでも日本語で話せるように心がけるだけでなく、この学生がアクティビティを通して日本語コミュニティとどうつながれるかを考えた。
- 実習で教えた学生がまた日本に戻ってきたいと思ってくれるような活動を考えようとした。

サマースクール（ウィンタースクールも同様）では日本語授業の最終日に受講生がプレゼンテーションを行う。したがって、滞在期間中はプレゼンテーションのテーマに即したプロジェクトが課されている。2019年度のサマースクールでは、日本の商店街での食べ歩きやお店巡りを経験してもらい、気に入った食べ物やお店の写真を撮るように指示していた。

このようなアクティビティを考える際に、日本語や日本文化を学ぶための活動にとどまらず、訪問先（この場合は、商店街の食堂やお店）でお店の人と交流ができるような活動をデザインしていた（付録 D を参照のこと）。

- 自分が担当する授業の教案を作るので精一杯ではあったが、昨年の授業やリレー講義で学んだことをどうやったら授業で活かせるか、これはいつも頭にあった。
- リレー講義では、日本語教育の現状や外国人が置かれた立場や、私たちが向き合わなければいけない問題や課題を知ることができて、目の前にいる学生に対する見方が変わった。



2018 年度のリレー講義後のアンケート調査回答に「リレー講義を受けて視野が広がった」という記述が多く見られたことは、前章で説明した通りである。2019 年度の教育実習の過程において、授業をデザインする際に、また教壇実習で受講生と触れ合う際に、実習生各々がそれぞれの形でリレー講義での学びを念頭に置いていたことがわかる。養成講座のモデル・カリキュラムの実施が、間接的にであれ、実習生の態度や姿勢にこのような効果を及ぼしていることを示唆していると捉える。

5. その他の取り組み：地域日本語教育への関わりの検討

5.1 外国語教育・多言語交流センター（仮称）設置構想委員会

本事業の一環として、外国語教育・多言語交流センター（仮称）設置構想委員会を設置した。趣旨としては、本研究科が従来積極的に取り組んできた地域連携の実績と知見を活かし、日本語のみならず多言語という枠組みで地域社会に貢献できる人材育成を行えるしくみづくりを目指すものである。実施期間は、1年目は2018年10月1日より2019年3月20日まで、2年目は2019年4月1日より7月31日までであった。

5.1.1 2018年度・2019年度の設置構想委員会構成員

嶋津百代（委員長）

高梨信乃（委員）

池田真生子（委員）

今井裕之（委員）

竹内理（委員）

山崎直樹（委員）

アンドリュー・バーク（委員）

守崎誠一（委員）

岡田敦（委員、吹田市教育委員会学校教育部指導室主幹指導主事）

林詩（委員、吹田市国際交流協会職員）

本委員会は、本学外国語学部・外国語教育学研究科の日本語教育担当教員と英語教育連携センターを軸として地域連携に関わる教員などで構成された。そして、本学の所在地である吹田市における地域日本語教育（年少者を含む）の関係者として岡田敦氏と林詩氏を構成員に加え、意見交換を行うとともに、今後の連携の足掛かりとした。

5.2 取り組みの目標

近年、日本国内において地域日本語教育の必要性が急速に高まっている。文化庁報告でも指摘されている通り、今後の日本語教育人材育成においては、地域日本語教育に参画し貢献できる人材の育成という要素が不可欠であり、そのためにはそれが可能な環境としくみを整えていく必要がある。このような観点から、本養成講座の拡充の一環として、受講生が地域日本語教育に恒常的に参画できるしくみをつくることを目指す。

5.3 取り組みの内容

2018 年度

吹田市における在住外国人への日本語支援について、吹田市国際交流協会の担当者と会議をもった。また、特に年少者日本語教育については吹田市教育委員会指導主事および吹田市内の小学校で巡回日本語指導を担当している教諭とそれぞれに会議を設けた。これらの関係者との会議により現状についての聞き取りを行った。また、実際に同市の在住外国人対象の日本語教室や年少者のための日本語サポートなど現場の見学を実施することにより、現状の把握を行った。

2019 年度

2018 年度に行った聞き取りと現状視察を踏まえ、養成講座を受講する複数の学生が、定期的に吹田市国際交流協会が実施する在住外国人を対象とする日本語支援に関わる活動を開始した。また、開始から数ヶ月経過後、受け入れ側となる国際交流協会担当者からの聞き取りを実施し、学生の活動状況の把握と検討を行った。

5.4 取り組みの成果

2018 年度は、上記のように吹田市の地域日本語教育の関係者や直接の担当者からの聞き取りや実際の支援の現場の見学などにより、吹田市における日本語指導や日本語支援を必要とする人々の現状と現在行われている指導・支援について、具体的に状況を知ることができた。

2019 年度は、学生が実際に地域日本語教育に関わる活動を小規模ながら開始した。また、これらの活動の状況ともたらした効果、課題などについて受け入れ側の担当者から聞き取りを行った。

以上のように、地域日本語教育に受講生が関わるための足がかりを構築し、実際に活動を開始したことは今回の取り組みの成果と言える。

5.5 今後の課題

今後は、聞き取りや見学で把握できた事柄とすでに学生が行っている活動の状況を踏まえながら、本学で日本語教育学を学ぶ学生が地域社会に関わり、何らかの貢献をしつつ自身も学び成長していけるようなしくみ作りを行っていく必要がある。

その際は、本研究科が英語教育連携センターを中核として積極的に取り組

んできた地域連携から得た知見を生かし、日本語のみならず多言語という枠組みで地域社会に貢献できる人材育成を考えていくことが望まれる。

同時に、何よりも重要なのは、地域のニーズに合致した活動を持続的に実施していくということである。

今回、地域の日本語支援活動の担当者との意見交換や、参加した学生の取り組みの検討で明らかになったことは、これらの活動における人間関係の重要性である。現場で求められているのは、単発的ではなく持続的であり、じっくりと関わりながら日本語学習者との人間関係を築いていけるような活動の在り方である。しかし、持続的な学生の活動のしくみを作るといっても、それがカリキュラムの中で制度化されたり、単位取得のために必須なものとなったりすると、自発的な動機に基づくべき活動の本来の意味が失われ、学習者とも、また他の一般の支援者とも人間関係を構築することはできない。

活動のしくみ作りは上記のような難しさを孕んでいると言える。制度や単位取得などの強制力とは無関係に、活動の本質的な意味を理解して、やり甲斐をもって取り組むような学生をいかに育てていくか。これは本養成講座の大きな課題であると同時に、本研究科の教育活動全体にも関わる課題であると思われる。

6. 事業全体の評価

6.1 「日本語教育専門家養成講座」の見直し・拡充の成果に対する評価委員会

本事業全体の成果を評価する組織として、「日本語教育専門家養成講座」の見直し・拡充の成果に対する評価委員会を設置した。実施期間は、2年目の2019年8月1日より9月30日までであった。

6.1.1 2019年度の評価委員会構成員

高梨信乃（委員長）

嶋津百代（委員）

山崎直樹（委員）

池田真生子（委員）

アンドリュー・パーク（委員）

竹内理（委員）

守崎誠一（委員）

今井裕之（委員）

奥田純子（委員、コミュニケーション学院学院長）

神吉宇一（委員、武蔵野大学大学院准教授）

本委員会は、本学外国語学部・外国語教育学研究科の日本語教育担当教員を含め各取り組みに関わった教員などで構成された。さらに、学外の委員として奥田純子氏と神吉宇一氏を構成員に加え、日本語学校の現状や外国人受け入れ政策の動向といった現在の日本語教育をめぐる状況を踏まえた評価が行われるようにした。

6.2 事業の成果

6.2.1 実習生のための教材の開発について

本事業において開発した教材は、文化庁報告に示された教育実習の6段階に沿って使用でき、実習生がポートフォリオとして利用することによる自律的な成長を促す材料として一定の存在意義と教育効果が認められる。

さらなる改善のためには、3.4で述べたように、教育実習だけでなく他の科目や外部の研究会・講演会などを含めた多様な経験を学びに結びつけていけるような工夫が臨まれる。

さらに、教材の使用の過程での実習生による自己評価が評価のための評価

に終わらず、真に内省につながる活動となるためには、実習担当者による適切な支援が必要である。したがって、今後、他機関も含め広く使用される教材とするためには、実習担当者がどう使うかの助けとなるマニュアル等が必要だと考えられる。

6.2.2 養成講座モデル・カリキュラムの実施について

本事業において実施したモデル・カリキュラムは、文化庁報告に示された教育内容を踏まえたものであり、多様化する現場に対応できる日本語教育人材の育成に大きく寄与できる、極めて意義深いものであったと言える。

しかし、本学を含め一教育機関が有する教員がカバーできる教育内容には限りがあり、そのみで今回のカリキュラムと同様のものを恒常的に実施するのは非常に難しい。このような教育内容を持続可能なものにしていくための何らかの方策が必要である。

具体的な方策としては、他の大学、日本語学校などの他教育機関との連携が考えられる。文化庁報告に示されているような広い教育内容に含まれるそれぞれの領域を専門とする教員の知識や経験を機関の枠を超えて出し合い、共有するしくみがあれば非常に有用であろう。

6.2.3 その他の取り組み（地域日本語教育への関わり）について

養成講座の充実・拡大において、今後ますます重要になる地域日本語教育に学生が関わる機会を増やしていくことは不可欠である。今回の事業で本学の所在地である吹田市の現状を把握した上で、実際に学生が地域日本語教育に関わる活動を開始したことは有意義であった。

今後は、このような活動を持続可能なものとし、かつそこでの学生の学びを大学における教育と有機的につなげていくようなしくみ作りが必要である。しかし、5.5でも述べたように、それが地域日本語教育に関わる活動を単位化するといった単なる制度作りであるならば、活動は本来の意味を失いかねない。学習者や他の支援者などとの人間関係を構築しつつ、その場で本当に求められていることを探り、実践し、同時に自らも学びを深めていけるような学生をいかにして育てていくか、今後も考えていく必要がある。

6.3 今後の課題

本事業は、本研究科の「日本語教育専門家養成講座」を文化庁報告で示された教育内容に照らして改善・発展させることを目的とするものであった。

これまで述べてきたように、本事業は、実習生のための教材の開発と使用、

養成講座モデル・カリキュラムの実施、地域日本語教育への関わりの模索という各取り組みにおいて、一定の成果を上げ、総合的に養成講座の教育効果と意義を高めることに成功したと言える。

今後の課題は、このような教育・活動を持続可能なものとするところである。そのためには、他の教育機関との横の連携、地域との連携を構築・強化していくことが重要であろう。

また、同時に考える必要があるのは、大学における日本語教育人材養成の担う役割は何かということである。文化庁報告でも示されているように、今後必要とされるのは、日本語教師という職業・立場にとどまらず、多言語・多文化社会に広い意味で貢献できる人材である。そのためには、日本語教育学にとどまらず、広く社会、文化に関わるさまざまな知見が求められるだろう。そうしたさまざまな分野の知のリソースを有している大学は、それを活用することで独自の役割を果たしていけるのではないだろうか。

付 録

A. 会議の記録

事業期間中に行った主たる会議を挙げる。

2018 年度

1) 日本語教育専門家養成講座カリキュラム検討委員会

第 1 回

2018 年 7 月 25 日（水） 9:30～10:30（関西大学）

- ・ 本事業実施の詳細な計画

第 2 回

2018 年 9 月 19 日（水） 9:30～10:30（関西大学）

- ・ 本事業実施の詳細な計画

2) 日本語教育実習生のための教材開発委員会

第 1 回

2018 年 8 月 29 日（水） 15:00～17:00（関西大学・ZOOM 使用）

- ・ 教材試作版の検討

第 2 回

2018 年 9 月 19 日（水） 16:00～18:00（関西大学・ZOOM 使用）

- ・ 教材試作版の検討

第 3 回

2019 年 2 月 12 日（火） 9:00～12:00（早稲田大学）

- ・ 教材試作版フィードバックの検討

第 4 回

2019 年 2 月 28 日（木） 16:00～18:00（関西大学・ZOOM 使用）

- ・ 教材試作版フィードバックの検討

3) 外国語教育・多言語交流センター（仮称）設置構想委員会

第 1 回

2018 年 12 月 10 日（月） 10:00～11:30（吹田市教育委員会指導室）

- ・ 吹田市初等教育機関における日本語支援を必要とする児童生徒の現状

第 2 回

2018 年 12 月 25 日（火） 10:00～11:30（吹田市国際交流協会）

- ・ 吹田市における地域日本語教育の状況

第3回

2019年1月25日（金）13:30～15:00（吹田市藤白台小学校）

- ・吹田市初等教育機関における日本語支援を必要とする児童生徒の状況

2019年度

1) 日本語教育専門家養成講座カリキュラム検討委員会

2019年9月25日（水）6:00～8:00（関西大学）

- ・カリキュラムに対する評価と今後の改善に向けての検討

2) 日本語教育実習生のための教材開発委員会

第1回

2019年8月13日（火）18:00～20:00（早稲田大学・ZOOM使用）

- ・教材試作第2版フィードバックの検討・完成にむけての討議

第2回

2019年9月20日（金）18:00～20:00（ルーヴェン大学）

- ・教材試作第2版フィードバックの検討・完成にむけての討議

3) 外国語教育・多言語交流センター（仮称）設置構想委員会

2019年7月26日（金）14:00～15:30（吹田市国際交流協会）

- ・吹田市における地域日本語教育の状況

4) 日本語教育専門家養成講座の見直し・拡充の成果に対する評価委員会

第1回

2019年8月13日（火）14:00～16:00（武蔵野大学）

- ・事業全体の成果に対する評価と今後の講座改善に向けての検討

第2回

2019年9月20日（金）18:00～20:00（コミュニケーション学院）

- ・事業全体の成果に対する評価と今後の講座改善に向けての検討

B. 見学等の記録

2018 年 8 月 9 日 東京女子大学

- ・現代教養学部・石井恵理子教授との懇談・意見交換
- ・日本語教員養成課程の学部生による教育実習の見学

2018 年 11 月 6 日・7 日 秋田国際教養大学

- ・専門職大学院日本語教育実践領域・佐野ひろみ教授、左治木敦子准教授
堀内仁准教授、嶋ちはる准教授との懇談・意見交換
- ・院生による教育実習および事後指導の見学

2019 年 1 月 22 日 宮城学院女子大学

- ・学芸学部・澤邊裕子教授との懇談・意見交換
- ・併設高校への留学生を対象とする、日本語教員養成課程の学部生による
日本語サポート活動の見学
- ・大学院生によるゼミ発表の見学

2019 年 1 月 30 日 吹田市立竹見台中学校

- ・「さくら広場」（渡日もしくは外国にルーツを持つ園児、児童、生徒を対象とする、ボランティアによる日本語支援と文化交流の取り組み）の見学

2019 年 2 月 21 日 吹田市国際交流協会

- ・「SIFA 日本語教室」（地域在住外国人を対象とする日本語クラス）の見学

C. リレー講義受講生へのアンケート調査

関西大学 外国語教育学研究科

文化庁委託事業：リレー講義
アンケート調査

文化庁委託事業「リレー講義」に関するアンケート調査

氏名：_____

日付：_____年 ____月 ____日

文化庁委託事業の一環であるリレー講義の参加者のご意見・ご感想を調査するため、アンケートを実施いたします。このアンケートは、今後の文化庁委託事業における活動を、向上させるための参考にするものであり、個人の評価などには一切関わりません。また、特定の個人情報が公表されることはありません。皆さんの率直なご意見・ご感想をお聞かせいただければ幸いです。つきましては、リレー講義に参加された方に、アンケートのご協力をお願いいたします。ありがとうございます。

1. 講義について

1) このリレー講義を受講した理由を教えてください。

.....

.....

2) このリレー講義で、特に印象に残っている内容があれば、具体的に教えてください。

.....

.....

3) このリレー講義で、学んだことは何ですか？

.....

.....

4) 3) で学んだことを、今後どのように活かせると思いますか？

.....

.....

2. 講義を通して

1) このリレー講義で、気になった点や改善すべき点があれば教えてください。

2) このリレー講義をほかの人にも勧めたいと思いますか？また、その理由も教えてください。

3) このリレー講義で、今回取り上げられなかったテーマで、以後、扱ってほしいテーマはありますか？

.....

4) このリレー講義を振り返り、感想・意見などありましたら、ご自由にお書きください。

3. ご回答いただきました「皆さん」について

- 性別： 年齢：20代・30代・40代・50代以上
- 国籍： 母語：
- 専攻： 学年：
- 日本語教育専門家養成講座の修了を目指していますか？：はい いいえ

<以上>

皆さんのご協力に感謝いたします

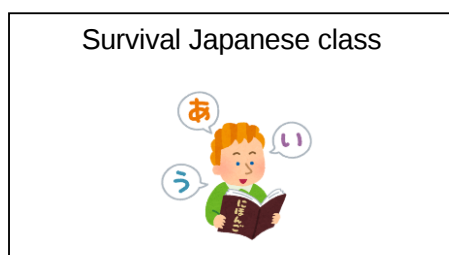
D. 2019 年度教壇実習での教育実習生作成の資料



はじめまして。
[Hajimemashite.]
(初次见面。)

私は ～ です。
[Watashi wa ～ desu.]
(我是 ～ ↑名字。)

よろしく おねがいします。
[Yoroshiku onegaishimasu.]
(请多关照。)



★ Survival Japanese Class									
日	時	曜日	場所	担当	内容	備考	出席	欠席	合計
1	10:00	月	101	山田	初級				
2	10:00	火	101	山田	初級				
3	10:00	水	101	山田	初級				
4	10:00	木	101	山田	初級				
5	10:00	金	101	山田	初級				
6	10:00	土	101	山田	初級				
7	10:00	日	101	山田	初級				
8	10:00	月	101	山田	初級				
9	10:00	火	101	山田	初級				
10	10:00	水	101	山田	初級				
11	10:00	木	101	山田	初級				
12	10:00	金	101	山田	初級				
13	10:00	土	101	山田	初級				
14	10:00	日	101	山田	初級				
15	10:00	月	101	山田	初級				
16	10:00	火	101	山田	初級				
17	10:00	水	101	山田	初級				
18	10:00	木	101	山田	初級				
19	10:00	金	101	山田	初級				
20	10:00	土	101	山田	初級				
21	10:00	日	101	山田	初級				
22	10:00	月	101	山田	初級				
23	10:00	火	101	山田	初級				
24	10:00	水	101	山田	初級				
25	10:00	木	101	山田	初級				
26	10:00	金	101	山田	初級				
27	10:00	土	101	山田	初級				
28	10:00	日	101	山田	初級				
29	10:00	月	101	山田	初級				
30	10:00	火	101	山田	初級				
31	10:00	水	101	山田	初級				

評価基準
[Hyooka kijun]
(评价标准)

- 出席・授業態度 [shusseki, jugyoo-taido] ⇒ 30%
(出勤率, 上课态度)
- ミニテスト [mini-tesuto] ⇒ 20%
(小测验)
- 宿題 [shukudai] ⇒ 20%
(作业)
- 最終発表 [saishuu happyoo] ⇒ 30%
(最终发表)

Presentation

7月30日に、発表をします。
[shichi-gatsu sanjuu-nichini, purezenteeshon o shimasu.]
(每个人都将在7月30号发表)

何を話しますか。
[nani o hanashimasuka?]
(你在发表时讲什么?)

日本語で 活動 しよう！
[Nihongo de katsudoo shiyoo!]
(用日语做活动)

Let's go to the shopping street!

天神橋筋商店街
[Tenjinbashi-ji-syootengai]
(天神桥筋商店街)

テーマ：お気に入りの場所
(我喜欢的店铺)

presentation

- ・商店街で お気に入りの場所を 見つけよう。(お店の名前)
- ・そこは商店街のどこにありますか？(～の前、となり)
- ・いくらですか？(値段)
- ・なぜお気に入りですか？(理由)
- ・場所の雰囲気はどうですか？(にぎやか・・・)
- ・お店の特徴(よいポイントや、営業時間、お店の人の写真や名前など)

テーマ：お気に入りの場所
[okiniiri no basho]
(我喜欢的店铺)

presentation

- ・去商店街找一找你喜欢的店铺(店内、店外、店前、店後、店中、店上、店下、店側、店元、店先、店中、店上、店下、店側、店元、店先)
- ・这家店在商店街的哪里？(どこ、どこで、どこから、どこへ、どこに、どこを、どこへ、どこから、どこに、どこを)
- ・多少钱？(いくら、いくらで、いくらから、いくらへ、いくらに、いくらを、いくらへ、いくらから、いくらに、いくらを)
- ・为什么？(なぜ、なぜで、なぜから、なぜへ、なぜに、なぜを、なぜへ、なぜから、なぜに、なぜを)
- ・店铺的什么？(なに、なにで、なにから、なにへ、なにに、なにを、なにへ、なにから、なにに、なにを)
- ・店铺的特点(优点、营业时间、店铺里的人、照片、姓名等)

Survival Japanese Class 课程中，将会学习如下内容

授業の予定
[jugyoo no yotei]
(课程表)

1 オリエンテーション	7 道案内 2
2 友達づくり	8 買い物 1
3 数字	9 買い物 2
4 食べ物	10 感想
5 レストラン	11 発表準備
6 道案内 1	12 発表準備

授業の予定
[jugyoo no yotei]
(课程表)

1 導入	7 問路 2
2 自我介绍	8 購物 1
3 数字	9 購物 2
4 食物	10 感想
5 在餐館	11 发表准备
6 問路 1	12 发表准备

がんばりましょう！
[ganbari mashoo!]
(一起努力吧！)

说再见

さようなら。
[Sayoonara.]
(再见。)

また、あした。
[Mata, ashita.]
(明天见。)

ほな。
[Hona.]
(回头见。)

またね。
[Matane.]
(明天见。)

ばいばい。
[Baibai.]
(拜拜。)

じゃあね。
[Jaane.]
(再见。)

道谢、不用谢

ありがとうございます。
[Arigato gozaimasu.]
(谢谢。)

どういたしまして。
[Doutashimashite.]
(不用谢。)

いいえ、どういたしまして。
[Iie dootashimashite.]
(没事，不用谢。)

ありがとう。
[Arigato.]
(谢了。)

いいえ。
[Iie.]
(不用谢。)

ひらがな
[Hiragana]
(假名)

	あ	い	う	え	お		か	き	く	け	こ
か	き	く	け	こ		さ	し	す	せ	そ	
さ	し	す	せ	そ		た	ち	つ	て	と	
た	ち	つ	て	と		な	に	ぬ	ね	の	
な	に	ぬ	ね	の		は	ひ	ふ	へ	ほ	
は	ひ	ふ	へ	ほ		ま	み	む	め	も	
ま	み	む	め	も		や		ゆ		よ	
や		ゆ		よ		ら	り	る	れ	ろ	
ら	り	る	れ	ろ		わ					
わ											